第 8 号
2023 年
9 月 24 日

「一食に愛を込めて～日曜給食活動のご紹介～」

東京教区浅草聖ヨハネ教会　日曜給食活動

土屋　寛子

「聖書の教えに基づき、ささやかな食べ物を差し上げる活動を通して『一人ひとりの命が守られ、誰もが一人の人間として大切にされ、愛されるべき存在である』というメッセージをお伝えする」そんな思いを形にしたのが日曜給食活動です。毎週日曜日の朝に、必要とする方ならどなたでもヨハネ教会で受け取っていただけます。

浅草聖ヨハネ教会のある東京都台東区には、かつての日雇い労働者の街「山谷（さんや）地区」や上野公園、隅田公園、上野駅周辺があり、今も様々な事情で路上生活をしている方々が多く過ごしています。それらの地区から徒歩圏の蔵前で、生活困窮者のための炊出し活動を始めてすでに 20 年以上が経っています。活動内容は手作りの炊き込みご飯を各人に250g配布することですが、徐々に口コミで広がり2010年頃には毎週500人以上の方が来会していました。その頃には私たち聖ヨハネ教会だけでは炊飯が間に合わず、いくつかの隣接する教会から、炊飯して届けていただく応援も受けました。また、複数の近隣住民の方から「炊出しは良いことかもしれないが迷惑なので、蔵前で配るのは中止してほしい」との反対意見が寄せられたので、活動時間を早朝に変更し、来会者へのマナー遵守の呼びかけ強化などの配慮に工夫を重ねて、現在に至っています。

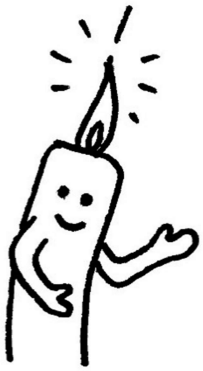
そして2020年3月コロナ禍による礼拝休止期間には、日曜給食活動もやむを得ず休止しましたが、約半年後に「常温保存食品の配布、密を避けるウオークスルー方式」に切り替えて再開。最近は、8時半から9時 50 分までの間に約100人の方に炊き込みご飯又は常温保存食品などを差し上げています。一年間で約5000人への食べ物の活動資金は、諸教会、諸団体、個人からの献金、献米、献品などに支えられています。また、ボランティアは自教会信徒だけではなく、近隣の教会信徒や住民、立教女学院、香蘭女学校、ボーイスカウト関係の青年たちが参加しています。誰かの役に立てる経験は、青年達にとって生きる力や優しい心の種まきにもつながっているかもしれません。

私たちは、社会情勢や行政等の支援が改善され、いつの日かこうした働きの必要がない社会が実現するよう祈り続け、これからも「ささやかでも当てにしてもらえる活動」を続けていきます。どうぞ、皆様からのお祈りとお支えをよろしくお願いします。

＊　＊　＊

前号に引き続き　東京教区で展開されている「食に関する活動を紹介いたしました。ボランティアの参加　献品や寄付のお気持ちがある方は　東京教区事務所宣教主事までご連絡ください。

mission - sec.tko@nskk.org



「2023年夏の中高生世代キャンプ」

東京教区中高生会

チャプレン執事ウイリアムズ藤田　誠

昨年に引き続き対面にて中高生世代キャンプを実施することができました。今年は8月18日～21日まで、長野県東御市にあるシャロームロッジで中高生世代キャンプは行われました。参加者は総勢22名で、昨年に比べて賑やかなキャンプとなりました。昨年に続いて参加したキャンパーもいて、継続的な繋がりを感じる機会にもなりました。スタッフはメインスタッフ3名、サブスタッフ4名、そしてチャプレンは執事荻原充チャプレンと執事藤田誠チャプレンの2名でした。

シャロームロッジは標高1700㍍にある湯の丸高原の中にある山小屋で、夏は冷房無しで過ごせる清涼感溢れる空間です。このような心身ともにリラックスできる環境で日常と離れた生活を参加者は送ります。スマートフォン、PCなどデジタル機器を持たず、参加者はキャンプのプログラムを通してお互いに知り合っていきます。今年のテーマは「聴くことと、伝えること。」でした。スタッフが時間をかけて準備したプログラムはジェスチャー・ゲーム、空中バレー、聖書の分かち合い、Tシャツ作り、合唱、キャンドルを使った祈りの時間、運動会、野外礼拝、キャンプファイヤーなどユニークなメニューの数々で、それは、キャンプテーマである「聴くことと、伝えること。」とリンクするものでした。

体を動かしながらのコミュニケーション、心と身体を静めての話し合い、そして、祈り合うときを通して、互いの存在を尊重することができたように私は感じました。それは、「安心してこの場所に居られる。安心して、気にかけていることを隣りの人に打ち明けることができる。」ということに繋がっているように思いました。

また、今年のキャンプには北関東教区の青年がサブスタッフとして関わってくれました。キャンプの準備、また、キャンプ期間中もキャンパーに常に寄り添ってくれたので、キャンパーは彼を信頼していました。

キャンパーもスタッフもチャプレンも皆が出会っていったキャンプと言えます。9月にキャンパーが集まるリユニオン、そして、スタッフが振り返る機会があります。そこで、それぞれの想いをキャンプの時のように安心して分かち合い、2024年度の活動へ繋げていくよう願い祈ります。

最後にキャンプに実際には参加はしませんが、キャンプのプログラムのこと、キャンプに関する事務的なことで支えてくれたサポートスタッフ、そして、コミュニケーションのことで研修の機会をつくってくれた青少年活動支援プロジェクトのメンバー、食事を中心にキャンプ生活やキャンプファイアーの段取りをしてくださったシャロームロッジのスタッフのみなさんに心より感謝いたします。

★フィールドワーク　だいこんの種をまこう　報告

「やっぱり当たり前は当たり前でない」

執事ヤコブ荻原　充

2022年11月に大根を掘り、その大根を練馬でフード・パントリー活動をしている「東京子ども子育て応援団」と聖マーガレット教会へ届ける活動を行いました。今年は大根の種まきから行い、その実りを収穫して届けようということで、昨年と同様に毛呂山聖霊教会のマルコ髙橋四郎さんの畑で、9月9日（土）に大根の種まきをさせていただきました。東京教区からは高校三年生1名と青少年活動支援プロジェクトの山畑璃奈さん、そして私の3名が参加しました。髙橋さんにご指導いただきながら、毛呂山聖霊教会のモニカ北村ミチルさん、リベカ柳澤亜樹子さん、また管理牧師の鈴木伸明司祭にご協力いただいて、無事終えることができましたことを神に感謝したいと思います。

当たり前と思うことが実は当たり前でない。いのちが与えられていることは当たり前ではない。それに気づいていることをわたしは大事にしているつもりでした。けれども、今回の大根の種まきで、一本の大根が土を鍬で耕し、畝を作り、穴をあけて種をまくということに始まって様々な作業を経て作られること、その有り難さが当たり前になっている自分に気づかされました。そしてまた、もう少しいけるかと思いましたが、自分の身体が全く思うように動かないことを突きつけられた作業でもありました。

★清瀬・草津教会交流について

2021年の12月新教区設立を東京教区と北関東教区がめざして初めての合同教役者会が北関東教区の志木聖母教会において行われました。その際、大森明彦司祭と松浦信司祭が協議し、清瀬聖母教会・聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂（ハンセン病国立療養所多磨全生園内）と草津聖バルナバ教会・聖慰主教会（ハンセン病国立療養所栗生楽泉園内）は交流教会として定期的に訪れること、そして同じ日に同時に司祭だけが移動すると司祭たちが互いに交流することができないので、日にちをずらして訪れるという合意を得ました。

2022年6月19日草津聖バルナバ教会から司祭を含む3名が清瀬聖母教会と聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂を訪問し、松浦司祭が両教会の主日礼拝での説教を、大森司祭が司式を担当しました。朝9時から聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂10時30分から清瀬聖母教会の主日礼拝、その後場所を全生園の食堂「なごみ」に移し、両教会の歓迎を受け、懇親の時を過ごさせていただきました。本当に皆様が暖かく迎えてくださったことを、心から感謝しております。

同年10月23日、大森司祭を含め清瀬聖母教会と聖アンデレ教会の皆様5名の方が草津を訪問し草津聖バルナバ教会と聖慰主教会との合同礼拝に出席をされ、大森司祭は説教のご奉仕をくださいました。礼拝後昼食を囲み懇談の時を過ごしました。

2023年に入り、6月ごろ松浦司祭が清瀬聖母教会と聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂を訪問する予定でしたが、草津での事情があり、訪問することができませんでした。しかし、8月26日から大森司祭と清瀬の信徒が聖マーガレット館（北関東教区草津研修所）に宿泊で来られ、27日の主日礼拝に出られ、聖アンデレ教会の信徒2名と共に、総勢6名で来訪されました。この日は午前9時からの聖慰主教会の礼拝に出席後、懇親の時を持ちました。午前11時からの草津聖バルナバ教会主日礼拝と、その後の懇親の時を同じく持ちました。両教会の説教も大森司祭が担当されました。

草津の聖慰主教会と東村山にある聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂は、共に国立のハンセン病療養所にある教会です。草津の湯之沢にはかつてハンセン病集落があり、その湯之沢で宣教師コンウォール・リーが聖バルナバ・ミッションを展開し、多くのハンセン病者の治療と福祉のために尽くされました。その湯之沢と聖バルナバ・ミッションが1941年に解散した際に、草津聖バルナバ教会の大方の信徒は草津のハンセン病国立療養所にある聖慰主教会に移ったのですが、9名の信徒は東村山市の多磨全生園に移りました。この信徒たちは当時聖公会の集団としての受け皿がなく単立の秋津教会に所属して終戦を迎えました。その後、かつて草津のコンウォール・リーのもとで働かれたシスター・エリザベツ（マギル先生）とネトルトン先生が全生園を訪れたことがきっかけとなり、1947年4月28日秋山・細貝両司祭による聖餐式が行われ聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂ができたと聞き及んでおります。

清瀬聖母教会の方々は今までも度々草津に来訪され、聖マーガレット館に宿泊されております。また聖慰主教会の信徒も、かつては療養所間の交流で聖フランシス聖エリザベツ礼拝堂の信徒との関りもあったようです。

昨年から始まった協働関係ですが、まずは交流を年1回以上行いつつ、親しみをより深めて行ければと思います。関係が深まるなかで、それぞれの教会がもっている宣教課題について少しずつ共有できることを期待しております。

（草津に昨年と今年来訪された聖アンデレ教会の方が、今年の4月に洗礼6月に堅信を受けられた草津聖バルナバ教会の信徒（東京在住）の教父母となってくださいました。）

2022年10月
草津にて

【宣教協働小委員会　巡礼チーム】

教会訪問記

東京教区　聖路加国際大学聖ルカ礼拝堂

7月8日、東京都築地にある聖路加国際大学聖ルカ礼拝堂の巡礼企画に参加しました。聖路加国際病院と聞くと、数名の病院関係者の知人と故日野原重明先生、そして地下鉄サリン事件を連想します。

当日初めて現地を訪れた時、異国情緒に溢れる博物館のように洗練された旧館と、「日本におけるもっとも美しいキリストの教会」と言われる荘厳なチャペルに目を見張りました。観光客さながら写真を撮ろうとすると、逸る気持ちを静めるようなアナウンス…、ここが巡礼の場であることを思い出しました。祈りと賛美、そして病院に関する説明が始まりました。

聖路加国際病院の歴史は、1870年代ウィリアムズ主教が築地の外国人居留地で宣教活動を開始したことから始まり、1900年に来日したトイスラー医療宣教師に引き継がれます。国際水準の医療機関として外国人や政治家を診るだけでなく、当時の築地界隈に暮らす貧しい人々にも無料で医療を提供していた事実に感銘を受けました。渡航時の医療検査機関、日本の看護教育においても時代の先端を担っておりました。関東大震災と過去の大戦、占領軍による接収、返還…、まさに激動の日本近代史を生きた病院です。その後の院内ツアーで地下鉄サリン事件の救済現場を見学しました。日本全国の病院と連携していたため速やかな原因究明と治療が行われ、当病院では死者を出さずに済んだと伺い、このような悲惨な状況にも共にいてくださる見えない神さまを感じました。

お昼は月島まで足を伸ばし、久しぶりにお会いした聖職ともんじゃ焼きを満喫。懐かしい方々との再会や、新しい出会いも散りばめられた巡礼となりました。

＊　＊　＊

次回は、10月9日北関東教区日立聖アンデレ教会へ訪問予定です。お申し込みお問い合わせは、「巡礼チーム」メールアドレスまで。

締切：10月1日

junreiteam@googlegroups.com

写真いっぱい！

巡礼チーム

教会訪問ブログ

★組織小委員会ってなぁに？

組織小委員会は、新教区設立に向けて、主に「組織的」な事柄について計画の提案・準備をするための小委員会です。

新教区設立に向けた準備作業スケジュール案、本年秋の定期教区会で協議される新教区設立推進継続の承認を求める議案草案、新教区の体制案や方針案、これらの策定の準備など、「屋台骨づくりの材料整備」をしています。

今月の川柳

ダイエット　それでも散歩は　近道を

この暑さ　浴びせてほしい　冷水を

思い出の　豊かさ香る　小麦肌

そういえば　聴こえず寂し　蝉の声

『きょうどう通信』へおたよりをお寄せください。
宣教協働へのご意見・ご質問は下記メールアドレスまで。ご意見は「特別委員会」で共有します。投稿はすべてを掲載できませんが、ご了承ください。
「秋」をテーマにした川柳もお待ちしております。お名前は載せません。
kouhou.k.t@gmail.com

『きょうどう通信』第8号
北関東教区・東京教区宣教協働特別委員会
広報小委員会